

宮崎夢柳の小説

岡 林 清 水

一

幸徳秋水は「泉州紀行」(「夏草」)のなかで、「東雲新聞の盛んな頃に、曾根崎の中江(兆民のこと・筆者注)の家へ出入した酒屋で小塚こづかといふのが、今は中の島に旅店を開いて居る。……此家に予の同県人宮崎夢柳君の詩が一二枚残って居る。彼の『自由の燈』に『自由の凱歌』といふ標題で、ヂューマのテーキング・バスタールを翻譯し、東都の文壇を風靡した一代の奇才も、今は殆ど何人の記憶にも存して居まい。」とのべている。

これは、明治三十四年(一九〇一)八月の文章であるから、夢柳没後十二年である。今や、夢柳没してすでに九十年、それこそその名は何人の記憶にも存して居ないかも知れないが、野崎左文さかきひだりが「私に見た明治文壇」で「東京の新聞小説も、明治十六七年頃から追々新氣運に向ひ、絵入自由の宮崎夢柳氏や、自由燈の小室案外堂氏な

どの筆に成る、自由民権思想鼓吹の目的で、仏国革命史などを骨子とした過激な歴史的小説が紙上に連載せられ、又坂崎紫瀾氏の『汗血千里駒』などという伝記小説が行はれるやうになつた。」とのべているのでも分るごとく、夢柳は明治十年代に、東京の絵入自由新聞などにより文学活動に従事し、「自由の凱歌」「鬼噉々」などの翻譯小説で注目された作家であつた。

この宮崎夢柳の伝記については、夢柳がなくなつた二日後の、明治二十二年七月二十五日の東雲新聞しのめが簡明にその略伝を掲げた。

安政二卯年土佐高知中島町に生れ父は宮崎富成なり母あつ子川村氏より嫁す明治九年母讚岐で没す……嗚呼居士が三十有四年の在世は社会の表面に於て其遺跡少からず居士が衆に異なるは斯る野暴マらしき政界の志士にして又た意気なる色界の粹客たりし事是れなり若し居士をして身上の裏面に廻はり生前に一篇の懺悔録を著さしめば艶話奇談の多きはただ盧騷先生ルイソの懺悔録のみに非る

べし惜哉悲哉 居士が臨終の際辞世の詩一篇を賦せんと欲し自ら筆を執り三十の二字を記したるも之を續くことを得ざりしは遺憾なり想ふに是れ三十年來云々との詩句なるべし……居士夫れ地下に瞑せよ

というものであった。

夢柳の生まれた場所は、足輕たちの住居の群集する、高知城東、新町のなかの中^{なか}新町^{しんまち}であったのだが、それを右の略伝では、中島町と誤記しているようなミスはあるものの、なかなか簡潔に夢柳の三十四年の生涯を叙述している。

夢柳の最後については、同じく東雲新聞（明治二十二年七月二十五日）に「夢柳居士終焉の記」がのっているが、それによれば、六月十八日（明治二十二年のこと・筆者注）病に臥したるが、体中細小の腫物を生じて点々斑をなす。医師山中篤衛投薬、その後発熱し、腫物はいえたが、日を経るに従ひ発熱は次第に度を高めて四十度以上に及び嘔吐を催はすことしきりなり。かくて絶食すること十有餘日、旧大阪病院院長吉田顯三、医学士菅沼貞吉、自然堂病院の院長大黒田龍、医師島崎槌彦氏等、交々之を診るも病名病根わからず、十月十五日ごろに至つて、嘔吐は止み発熱も大いに減じ殆ど快癒に赴きたるも、永い絶食のため衰弱甚だしく起つ能はず、いくばくならずして腫物再発、時として発汗すれども多く苦痛を覚えざるが如く、日夜只だ睡眠するのみ、同十八日ごろより時となく嘔^{さく}を催はし発熱は再び四十度以上に及びしが、同

二十三日午前九時三十分遠遊したり。

とある。まさに短命、悲壯の終焉というべきであろう。

七月二十四日の午後三時、大阪堂嶋浜通一丁目の宮崎の家より出棺し、神式をもって天王寺村の阿部野墓地へ埋葬したのだが、夢柳の父^{とみしげ}富成は、当時六十有餘歳、高知にあるも老衰で大阪に来ることを得ず、夢柳の姉とその夫松本成直が相伴うて来阪し、夢柳の看病をした。

夢柳の父については、寺石正路著「土佐偉人伝」（大正三年六月十日・富士越書店発行）によれば、「父は名東才右衛門後宮崎富成と称し維新前勤王を以て聞へ晩に讃岐琴平宮祠官^{なとう}となる」とある。

宮地美彦の「維新土佐勤王人名録」（昭和十二年一月三十一日発行）によれば、名東才右衛門の項に、「通称才右衛門後宮崎萬八と改称し、名を富成^{とみしげ}と改む、高知市中新町の人にて和歌をよくす。……後年讃岐国琴平宮の神職となれり。」とある。高知県立図書館蔵の「土家族家譜」によれば、宮崎萬八は、明治四年二月士族仰せつけられ、同年二月三十日、第十等官史生社寺係、同年六月二十四日、第九等官権少属社寺係、同年六月二十七日には戸籍係として川之江詰めを仰せつかっている。この頃から、夢柳の父は社寺方面の知識にくわしかったことが窺える。「旧高知藩勤王人名録」（「皆山集5」掲載）にも、名東才右衛門の名が見えるのだが、その上に、「現今宮崎富成」とある。これらによって、宮崎萬八・富成が、幕末の頃には名東才右衛門とあって、勤王運動に名を連ねた血氣の士であつ

たことがわかるのである。

宮崎夢柳は、この名東才右衛門、のちの宮崎萬八・富成を父とし、
ゑつ（川村氏）を母として、安政二年（一八五五）高知城東中新町
（現、高知市桜井町）に生まれた。富成は学問を好み、ゑつもまた
四書五経を暗誦するような賢婦であったので、夢柳もなかなかの秀
才だった。横山黄木（おうぼく）は夢柳を評して「吉田稔・谷民衛
と共に三鬼才の称あり」とのべている。

夢柳は本名を富要とみやすといい、号を芙蓉散史、別号夢柳居士又は夢柳
狂士・夢柳粹史といった。早くから学に親しみ、和漢の学を近く
の新町田淵たぶちの徳永千規ちのりに学んだ。千規は武市瑞山（田淵に道場をかま
えていた）に師と仰がれた勤王学者であった。

明治維新の際には、夢柳はすでに数え年十四歳であり、武市瑞山
を中心とする新町の人たちの勤王運動を通して、その挫折と成功と
限界とを、少年ながらも感得し、時勢の流れをかなり観察していた
はずである。

土佐藩校致道館で経史詩文を学ぶ傍ら、坂崎紫瀾・結城凡鳥・土
居香国しうこくなどと交ったのだが、明治三年（一八七〇）夢柳十六歳ほんちようの時、
東京に遊学しさらに詩文の才をみがいた。だがその一方、夢柳は東
京に、戦後の頽廢を看取していたらしく、土佐の旧友結城凡鳥らと
放蕩生活に入って、父の不興を買ったこともあった。

この夢柳が二十歳になった頃、島本仲道号北州が北州舎の本部を
大阪から東京に移したが、夢柳はこれに入って、北州舎の事業を助

け、仲道から愛された。この島本らの感化で夢柳は自由民権思想を
抱くようになったといつてよからう。

島本仲道は、明治維新前夜、武市瑞山の党に加わり、勤王倒幕運
動に従事し、文久三年（一八六三）九月その獄に坐して、危うく命
ながらえることのできた壮士であった。維新後は、明治四年（一八
七一）八月司法省に入り、時の司法卿江藤新平（佐賀の人）の世話
になり、その影響をうけた。征韓論に敗れた後江藤は、明治七年（一
八七四）二月佐賀の乱をおこし失敗したが、島本は帰高して立志社
創立の板垣を助け、法律研究所を設置した。ついで明治七年六月上
阪して、北州舎を起し、八月には北州舎を大阪から東京に移し、東
京を本部とし、大阪を支舎とした。

夢柳は、この東京の北州舎に入り、政治・法律の学を修めながら、
島本の感化で自由民権思想を抱くようになったと思われるのだが、
明治十三年（一八八〇）の七月、高知新聞が発刊されるや、夢柳は
坂崎紫瀾・和田稻積いづみなどと共に、同新聞の記者の班に加わり、自由
民権運動家として、政談演説に、新聞の文章に活躍する一方、新聞
に漢詩をのせたり、小説を発表したりした。

したがって、夢柳の文筆活動を様式的に大別すれば、漢詩人とし
て、論説文記者として、小説家として、の三様式での活動が考えら
れるのだが、夢柳の文学的生涯を、時代的に大別すれば、次の三期

――第一期 高知時代（明治十三年七月↓明治十五年春）・第二期
東京時代（↓明治十九年六月）・第三期 高知、大阪時代（↓明

治二十二年七月二十三日)——に分けられる。夢柳の文学的生涯は、また自由民権運動文学史でもあるといえよう。

自由民権運動は明治七年(一八七四)の民選議院設立請願運動の頃から、明治二十三年(一八九〇)の国会開設に至る間に、国会・憲法・政治的自由を求めて展開された反政府的政治運動であったが、この運動のなかで導火線の役割を果たした板垣退助(土佐)らの民選議院設立の建白から、土佐の立志社の活躍を経て、後藤象二郎(土佐)らの大同団結運動に至るまで、土佐の演じた役割が圧倒的に大きいことは誰しも認めるところであろう。

それとともに、この運動のなかで土佐人によって数多くの文学的発言がなされ、とくに明治十年代において特異な文学作品が生み出されていることは、これもまた注目すべきことである。その主要なものを、内容的に分類して挙げるならば次のようなものである。

1 民権歌謡文学

よしや武士(安岡道太郎 明治一〇・一〇)

民権田舎歌(植木枝盛 明治一二・四)

民権踊り歌(坂崎紫瀾明治一三)

2 実録的風流文学

イ 風流小説

野路の梅が香(宮崎夢柳 明治一四・四・三〜一四・五・一)

全八回・高知新聞)

ロ 風流漢詩

3 翻譯文学

イ 翻譯美学

維氏美学(中江兆民 明治一六・二一上巻・明治一七・三下巻)

ロ 翻譯自伝

垂天初影(宮崎夢柳 明治一九・二二・二三〜明治二〇・二

三、土陽新聞)

4 政治小説

イ 世話物的政治小説

春窓娘読本(和田稻積 明治一五・二・一五〜一五・二・二七

高知新聞二回、土陽新聞二回)

ロ 歴史物的政治小説

南の海血潮の曙(坂崎紫瀾 明治一三・九・一九〜一四・九

二、高知新聞)

東洋自由嚙(和田稻積・西森拙三共編明治一五・八)

青天霹靂(島本仲道 明治二〇・八・三〇)

ハ 実伝的政治小説

汗血千里の駒(坂崎紫瀾 明治一六・一・二四〜一六・九・二

七、土陽新聞)

ニ 意識革命的 political 小説

自由乃凱歌(宮崎夢柳 明治一五・八・二二〜一六・二・八

自由新聞)

鬼歌(宮崎夢柳 明治一七・二二・一〇)一八・四・三・自由燈)

ホ 思想的政治小説

三醉人経綸問答(中江兆民 明治二〇・五)

5 獄中文学

イ 獄中述志の文学

立志社の獄での獄中漢詩……岩神昂・大江卓・谷重喜らの漢詩

詩

保安条例の際の獄中漢詩……横山黄木らの漢詩

ロ 獄中報告文学

柿色衣袂みやげ(西森拙三 明治一五・三・五)一五・三・一六、土陽新聞)

獄屋土産・豪賊大坪万蔵夷伝(坂崎紫瀾 明治一六・七・三

一六・一〇・二一・土陽新聞)

6 革命的詩文学

自由詞林(植木枝盛 明治二〇・一〇)

7 啓蒙的評論文学

天賦人權論(馬場辰猪 明治一六・一)

天賦人權辨(植木枝盛 明治一六・二)

政治小説の効力(坂崎紫瀾 明治一八・五)

このような土佐の自由民権運動文学のなかで、夢柳の小説はどのような意義をもつであろうか、これより高知における夢柳の小説を

とりあげ、その特色にふれながら、その意義について考えてみたいと思う。

二

第一期、高知時代の夢柳の小説には、「春色雙木(樹)の花」

(全十回、明治一四・二・二二——一四・三・三〇、高知新聞)・

(野路の梅が香)^{のちうめか}(全八回、明治一四・四・三——一四・五・一、

高知新聞)・「近水の樓台月の面影」^{みぎはうてなつきおもかげ}(全十回、明治一四・七・一四

——一四・八・一三、高知新聞)・「薄化粧鏡の花」^{うすげしづかみがきはな}(第一回、

明治一四・一・一六 第二回、明治一四・一・一八、高知新聞

第三回、明治一四・一・二一、一四、土陽新聞)・「深山の樹木」^{みやまのきぎ}

(第一回、明治一五・六・一四 第二回、明治一五・六・一六、高知自由新聞 第三回、明治一五・六・二二、高知新聞) などがある。

第二期、東京時代の夢柳の小説には、「仏蘭西・革命記 自由乃

凱歌」^{かちどき}(全九十六回、明治一五・八・二二——一六・二・八、自由新聞)・「魯西国・虚無党 冤柱の鞭苔」^{むじつしもと}(全十五回、明治一五・

九・一——一〇・二八、絵入自由新聞)・「ガーネット・ウォルス

レーの伝」(全十五回、明治一六・一・二四——一六・二・一、絵入

自由新聞)・「蝴蝶世界夢の通路」(七回、明治一六・一・四——

一六・一・二〇、絵入自由新聞)・「高峰の荒鷲」^{たかねあらし}(全五十七回、明

治一六・五・二三——一六・八・一六、絵入自由新聞)・「憂世乃涕淚」^{うきよのなみだ}

(全七十五回、明治一六・九・一四一―一六・一二・二八、自由新聞)

・「龍動塔話」(四回、明治一六・一〇―一六・一二、歐米政理叢

談)・「佛蘭西・太平記 鮮血の花」(全五十六回、明治一七・五・

一一―一七・九、二三・自由燈)・「虚無党・実伝記 鬼歌」

(全七十三回、明治一七・一二・一〇―一八・四・三、自由燈)などがあり

なかでも「自由乃凱歌」「鬼歌」は夢柳の代表作といわれている。

第三期の、高知、大阪時代の夢柳の小説には、「垂天初影」(全

二十三回、明治一九・一二・二二―二〇・二・三、土陽新聞)・

「芒の一と叢」(全三十五回、明治二一・一・一五―二一・三・九、東

雲新聞)・「佛国・史談義勇兵」(全六十二回、明治二一・五・二九―二一・

一二刊、東雲新聞)などあり、別に「自由乃凱歌」を東雲新聞にの

せ、明治二十二年(一八八九)五月刊行した。これは、明治十五年自

由新聞に掲載したものの未刊分を改訳し、これに続稿を附したもので、

中江兆民・島本仲道(北州)がその序文を書いている。

この夢柳の小説の、第一期・二期・三期を通じていえることは、

夢柳の殆どの作品で女性が重要な役割を果していることである。

夢柳の女性との交渉史はかなり有名なもので、夢柳没したときの

東雲新聞の夢柳小伝(明治二一・七・二五)もそのことにふれていた

し、横山黄木も、夢柳の漢詩は艶体をもってまさと評している。

〔南海漁唱第三集……美蓉兄詩以艶体勝〕若い頃結城凡鳥と東

京で遊んだ時から、花柳界の消息にもよく通じていたし、岸田俊子

(のちの中島湘煙)との唱和詩も有名である。自由燈においても、

女性の地位について数多くの発言を行っているし、女性へのおもいを述べた詩も多い。とにかく、夢柳は自由民権運動への熱情と共に、女性への情熱を傾けていたのであり、夢柳は自己の小説において、この情熱を具体化したものと考えられる。

もっとも、自由民権運動文学を担う人たちは、誰しも女性に大いなる関心を示したのであり、坂崎紫瀾も植木枝盛も、女性の地位について数多くの発言を行い、花柳界の女性だけでなく、進歩的・近代的な女性との交際も目立つのであるが、この紫瀾とか枝盛その他の自由民権運動文学の旗手たちと比べて、夢柳は生活・運動面のみでなく、作品の上で女性を描いた作家であった。

夢柳の「歌妓某に與ふる書」(「南海遺珠」第一集―明治一四・七・二四発行―掲載)では、東京日本橋の芸妓をおもいおこして、

「加之。有明眸皓齒楚楚動人之態余一瞥恍然情波忽起。心火頓燃。

窃以為。天下雖広。人間雖衆。焉有復与卿競其才姿者哉。」とのべ、

「憂世の涕淚」では、「皓齒丹唇霧鬢風鬟。錦の衣綾の裳。斜めに

傾むく花帽を。灰白色なる紗網もて。中ぞゆかしく掩ひしは。蛛絲

に籠れる海棠の。露を含める風情なり。斯る美人妙姫に対し。誰れ

か丹田数寸の。情芽を萌さざるものあらん。」(第六回、明治一六・

九・二〇、自由新聞)と記している。また「鬼歌」では、「眼は秋

の波を澄ませ眉は春の柳を描き花を欺むく艶美の纏致宛ながら蛛絲

の露を帯びし海棠を籠めたる風情実に愛らしき娘子なるが」(第一

回)とか、「その容貌より説き出さんにソヒヤは生れ得て美麗妖艶

群を越え……その姿の婀娜たるは如何なる石心鉄腸の人といへども心を蕩かし魂を撼はれざるものはあらざるべく眉は秀で眸は涼しく……朱唇の間に皓齒を現はせしは、翠の山に月の出でたるが如く、籬の中に花の綻びたるが如し」（第十回）とのべているし、「芒の一と叢」では、「年の頃は十七八にて頭は時様の束髪に一朵の薔薇の艶を添へ色白く眉秀で眼涼しく唇紅し……一とたび之を見たらんには釈迦も煩惱の奴隷となり耶蘇も愛慕の犠牲とならん絶世の佳人なるが」と描いている。

夢柳は女性美を描くに当って、女性美表現の語彙が類型的で、「皓齒丹唇」「眉目清秀」「霧鬢風鬟」などを多用するばかりでなく、美女をあらわすことばとして、「解語花」「美媛」「容色嬋娟」などを使用している。さらに、男性の情火、情芽をかきたてるものとして、女性美をいささか露骨に叙述するのを常套手段としているがために、夢柳の女性描写は漢詩・漢文的ではあるが、通俗的で前近代적であるといえよう。

だが、その一方、夢柳の作品に登場する女性には、近代的思想にめざめて行動する女性が多いのであり、「自由乃凱歌」のカセリイオン、「冤柱の鞭笞」のヴェラ・サシュリッチ、「憂世の涕淚」のアリス、「鮮血の花」のシオン、「薔薇の露」（この作署名なきも、夢柳と思われる）のシオン、「鬼歌歌」のソヒヤ、「芒の一と叢」の文字など、その代表的女性である。

夢柳の小説では、漢文漢詩的類型的語彙でもって、直ちに情芽に

ふれたりする前近代の通俗的女性描写と、政治的・前進的に行動する近代的思想的女性の登場とが同時にあらわれているといえよう。夢柳の作品にみられる女性描写の、前近代の通俗性と近代の清新性との混濁が、夢柳文学の変革期的特色となっているといえようが、それらの変革期的女性描写の背後において、牢獄の人生・社会を夢柳が感じとっていたことも、これまた、夢柳の小説の特色として見逃してはなるまい。

三

夢柳の小説の特色は、変革期的女性描写と、その背後に牢獄の人生・社会を感じとっていた点にあり、ここに夢柳の小説の近代的意思があるのだが、これはたんに、高知における夢柳の小説にあらわれていると考えられる。

「春色雙木の花」は、高知城下枳形に住居する林某の娘お留の、明治八年から十三年頃へかけての、いわば妖婦伝である。高橋お伝ほどではないが、十六歳で若手役者実川若市に溺れ、みついだりしたのを手始めに、色じかけで金を男からまきあげようとしたり、上町の呉服屋をかたたり、二度計画的に離縁になったりした話をまとめたものである。「かくとだにえやはいぶきのさしも草 さしもしらじなもゆる思ひを」（藤原実方朝臣・後拾遺卷十一恋の歌）の歌をにおわしたり、「春雨にしっぽり濡るゝ鶯の羽風も絶へし夕

まぐれ」と、嘉永の頃全国流行の小唄を冒頭に引用したりして粋なものととなっているが、この作品はどちらかといえば、現代を意欲的に生きようとする変革期的女性を描いたものであった。「年は二十か白妙の雪の肌に花の顔、当世風の大島田へ五分玉の鉤さし本南部の微塵縞黒縞子の帯をしだらもなく結び下げたる美人」とお留を描いているが、この作品では、このようなお留の美よりも、ドライに悪に向っていくお留のエネルギーが魅力となっているし、夢柳もこのような女性を描くことにより、そこに変革期的様相を、さらにいえば、明治維新の精神が十分に達成されないままに牢獄の様相を呈している時代相を、みようとしているともいえそうである。

「野路の梅が香」は、土佐の国中村の劍客樋口真吉の娘お梅の薄倖の生涯を記したもので、いわば「女の一生」と名づけてよい作品である。明治三年（本文に六年とあるは誤植）の秋の最中、父の真吉が上京中に死没し、一家零落したので、お梅は母を養わんがために高知に出て、明治五年の春の頃玉水新地の丸新樓に奉公するうち、

高岡郡宇佐村の中野某と恋仲になって奉公を引き、中野の妻となったが、中野の妾の嫉妬を恐れ、三か月で逃げて丸新樓へ帰った。その後、高知南奉公人町の浜田菊馬と恋に落ちたが、間もなく官の説諭をうけた樓主のはからいで女に暇をやることになり、お梅は心ならずもその樓を出た。しかし生活に困って、高岡郡佐川村の起上り樓で稼いでいるうち、明治六年のはじめその土地の黒金屋の妾となったが、妊娠と同時に養生金二十円で帰され、高知常盤町瀬戸屋虎

蔵方で女の子を産んだ。いよいよ困窮したお梅は、黒金屋へ無心に出かける途中、伊野村近くで幼児は死に、お梅は悲嘆にくれながら再び佐川の起上り樓で稼業を始めた。やがて高知へ転じて、玉水新地開盛樓で芸者となったが、お歌という仲居に虐待されて行方知れずになった。

これが「野路の梅が香」のあらましであるが、この女主人公お梅の父、土佐中村の劍客樋口真吉は、幕末の頃土佐中村の劍客で勤王家として有名だった樋口真吉（武、通称は真吉字は子文といい、彬斎、愚庵、南溟等の号あり）と同姓同名、土地も時代も同じ、劍客の点も一致するし、まず同一人物とみられるのである。実在の樋口真吉は、文化十二年（一八一五）中村に生まれ、明治三年（一八七〇）六月十四日東京で死んでいる。

だが、中村市の旧戸籍簿によれば、（中村市立図書館内山崎進氏の報告による）真吉には貞・仲の二女と嗣子鵬次郎あり、貞は嘉永四年（一八五二）生まれで明治二十六年（一八九三）死亡、結婚した様子はない。二女仲は万延元年（一八六〇）生れで、明治十一年（一八七八）八月、高知の士族森俊直の長男俊家と結婚したが、同十三年（一八八〇）二月離婚し、翌明治十四年（一八八一）六月中村の佐井龜太郎と再婚している。

「野路の梅が香」のお梅に該当するものを、ここで求めてみると、正式に結婚していない貞ということになりそうであるが、小説の樋口一家と、実在の樋口家族の様子とでは、かなり異っているよう

である。

したがって、ここで問題にすべきは、女主人公のモデル問題よりも、幕末の勤王志士剣客として有名だった中村の樋口真吉と、同姓同名の中村の剣客樋口真吉の遺家族の零落・娘お梅の薄倅の生涯を描いたこの作品の意図であろう。

たしかにこの作品には、高知の花柳界の女性の消息を伝えたという面もあるかもしれないが、夢柳の父才右衛門（宮崎富成）が土佐の勤王家であり、土佐勤王党首武市瑞山の家の近くで育った夢柳であってみれば、かれは当然、実在の土佐の勤王剣客樋口真吉を意識して、この作品を書いたはずである。

明治十三年九月から明治十四年九月へかけて、高知新聞で坂崎紫瀾の「南の海血潮の曙」などが掲載され、幕末の土佐勤王の動向が、正気あふれるものとして紹介されているとき、誰しも幕末の勤王志士剣客として有名だった中村の樋口真吉を連想する人物を登場させ、その遺家族の光栄を描かないで、娘お梅の数奇な生涯をとりあげたことは、意味あるものと思われるのである。

これこそ、裏から土佐勤王家を描いたことになるし、下部の視点から眺めた維新の歩みであり、女性の立場に焦点をおいた変革期の牢獄的悲劇ということになるであろう。ここに夢柳が、変革期の暗い女の一生と、明治維新後の牢獄的人生とを漠然と感得していたとみることも、当然可能であるはずである。この作品には、表だった政治的・自由民権運動的抵抗の姿勢はみられないのだが、現代の女性

の悲劇描写を通し、牢獄的現代社会批判を含んでいることは認めてよいであろう。

「近水の樓台月の面影」は、第一回（上）が明治十四年七月十四日、第一回（下）が七月十六日、第二回が七月十八日、第三回が七月二十二日、第四回が七月二十四日、第五回（上）が七月二十六日、第五回（中）が七月三十日、第五回（下）が八月一日、第六回が八月三日、第七回（上）が八月四日、第七回（下）が八月六日、第八回が八月九日、第九回が八月十一日、第十回が八月十三日の高知新聞にのったもので、全十回、十四日にわたって掲載された。

阿波徳島の常三島じょうさんじまに住んでいた村瀬信次の娘お照は、家族の犠牲としてある官員の妾となるが、後、徳島富田町の芸者となり、さらに高知へ流れて来る。百做会社の社員で、土佐の吾川郡西畑村の土族矢野織太郎は、玉水新地陽暉樓で、お照に深く馴染み、女と一緒に徳島で刀剣などの商売しようと出かける。だが折柄の西南の役で、土佐人で刀剣商というのが阿波の役人に疑われ、男は拘囚の身となる。百方手を尽してやっと放免されはしたものの、その土地では如何ともなし難いので、男は東京に出る。お照は大阪の川口辺の漁士の家に身を寄せて、矢野の消息を待っていたが、何の便りもない。そのうち、家の主人の横恋慕に堪えかね、やっと高知へ逃げ帰る。それからお照は、幾人ともなく情夫を持ちたりして、東京の男から消息があったも見向きもしない。

こんな梗概であるが、この作品もまたお照という女の流転の生涯

である。西南の役を背景とした時代のなかで、一人の女性が家庭の犠牲となったり、男の商売にまきこまれたり、男の情欲にかかわったりしながら生きる姿に、明治維新後の牢獄の人生をみようとしているといえよう。情天教主寄稿の「月の面影・拾遺物語 楊州一夢」(全九回、明治一四・八・一六―九・二、高知新聞)によれば、お照は夢柳の愛妓であったというが、「近水の樓台月の面影」では、そのようなことはおさえて、客観的にひとりの女の生涯をまとめている。

「薄化粧鏡の花」は、夢柳粹史の署名で書いているが、これは、年の頃十六七の眉目美^{みめよ}き娘が、高知帯屋町のひろめ屋敷で貧しく住む母(もとお馬廻の家)の病気を、潮江の天満宮に祈っての帰途、多勢の乞食に囲まれて、ひどい目にあおうとしているのを、長浜辺の闘^{いぬよせ}大会から帰っていた若者が助けて送って行くというはなしである。

「深山の樹木」は、もと土佐の士族亡河野仁吾の長男河野周太郎と、常陸の人妻木利平(老人)との間の物語りの体裁をとるもので、水戸城の南、長岡の原に通りかかった年の頃四十五六の婦人が、瘡に苦しんでいるのを、連れの十三四の娘が介抱しているところで中絶している。

かくの如く、第一期の夢柳の小説は、牢獄的環境のなかの女性を描いているといえようが、第二期の小説では、牢獄が一つの素材となり、具象的牢獄を通して牢獄的社會状況を批判する方法をとるよ

うになった。そして第三期の「垂天初影」(ルーソー「懺悔録」の翻譯)などは、牢獄的世界の彼方にあるものを望むものとなり、ルーソーを通して、飛翔する精神を見出そうとするものであった。

つまり夢柳は、牢獄的世界の設定を通して、女性への情熱と、明治維新後の専制政治への抵抗とをあらわしたのであり、ここに示された、性^{せう}と政^{せい}への情熱の牢獄的形象化こそ、夢柳の小説の特色を形づくるものであり、交革期的文学としての第一歩を印するものであった。

《この稿は、拙著「自由民権運動文学の研究」(昭和四八・三・二五発行)のなかの「夢柳における牢獄文学の形成」をよりどころとして、それを改正補筆したことをお断りしておきます。》

参考文献

政治小説研究上 柳田泉
仙寿山房詩文鈔 土居香国
土佐偉人伝 寺石正路

(高知大学教授)